

2017年8月5日（土）23時～放映 NHK Eテレ

ETV特集「告白・満州開拓団の女たち」を観て

1. 感想

まず、よく話されたなあと思いました。今まで、満州でのソ連兵の性暴力（レイプ）については、目撃した話や、恐れて過ごした話は聞いてきました。だが、被害に遭われた人が自ら語るところはなく、周りは触れないようにそっとすることが最善と対して来たように思います。そしてなかったことのないようにして過ごしてきたと思います。

日本の社会では、被害者へのバッシングは当たり前でしたし、古くからの女性観は、男性優位で女性の権利は低いものでした。そして、戦争という場では性暴力は、当たり前のこととされ、日本軍がしたことも闇に葬ろうとしてきました。

この重たい「証言」、長く言えずに秘めてきたという意味では「告白」を、しっかりと受け止めなければいけないし、受けとめられる社会として成熟してきた社会であることを願います。戦争と性暴力、戦争と女性、多くのことを伝えてくれたと思います。みんなで、戦時下にあった事実をしっかりと知って、2度と繰り返されないようにすることを考えていきたいと思っています。

去年亡くなられた安江善子さんが語っておられた場所は、阿智村の「満蒙開拓平和記念館」で第2回目の講演会に来て下さっておられたのだと教えていただきました。聞く人があり、その話の真実を生きてくれる人がいて、辛い体験も話せます。記念館が「満蒙開拓」の事実に向き合い、平和への願いを紡いでいく場だという信頼や期待を込めて話されたのだと思います。語れる状況を作った記念館の存在は大きいと思います。

日本の社会は、戦争の事実に向きあえるように変化してきています。戦時下の性暴力の発言も、大切にしたいと思います。

身近なご家族や、元開拓団員の「遺族会」の方も、番組では語っておられました。生か死か、それしかなかった敗戦後の毎日、帰還してからも厳しい生活、充分は語れなかつたと思いますが、この方たちも支える立場で共にしっかりと生きてこられたのだと思いました。

番組全体に対しては、丁寧に取材されていると思いました。

佐藤ハルエさんの「生きなきやと思いましたね」ということばが胸にひびきました。

番組では、「両隣の来民・高田も自決」と出ましたが、もう少し詳しく触れてほしかったです。

黒川開拓団があったのは、あの熊本の「来民開拓団」の全員自決のあった所のすぐ隣りです。来民では、8月15日には満州警察官のだましによって人質をとられ、武器も奪われ、2000人の現地人の襲撃で、8月17日には272人が自決したそうです。一人だけ連絡員として生きのびた人の記録が「満蒙開拓史」に残っています。黒川開拓団でも、そういう状況で、自決するのか生きるのかを選択するような状況の中でのできごとだったというのは、現代を生きる人にはなかなかわかりにくいことだと思われました。

ハルエさんのお父さんの長太郎さんの「帰らないかん」「命をもらつといて、そんな死に方するんじゃない」ということばがありました。「捕虜になるより死を」「辱めを受けるより死を」「お国の為に死を」という当時の死生観に対して、大きな発言だったと思います。結局は、若い女性たちを初め多くの犠牲をはらいましたが…。それでも生きて帰って来られたことは良かったことでした。

「満州開拓」について、番組では多くを語ってはいませんでしたが、国策で移民を奨励し、現地の人を立ち退かせたり、土地を安く買い上げたと、触れてはいましたね。満州開拓とは何だつ

たのかを知るには、こういう悲劇も知つていかなければと思います。

2、戦後72年が経つて

よく、シベリア抑留の3大苦として、飢えと寒さと強制労働がいわれますね。

満州開拓団の3大苦は、現地人の襲撃、ソ連兵の襲撃と掠奪と性暴力、収容所での飢えと寒さと病気の流行。7大苦になりますね。27万人の開拓団員のうち8万人が旧満州の地で亡くなつたことを、もっと多くの人に知つて欲しいです。

体験者は、多くを語ることがないまま鬼籍に入つてゐています。そういう時に今回の証言は、大きな意味があると思います。

今回は、「告白」と題しての証言でした。女性の性被害が公の場で裁かれるのに、長い年月がかかった

日本の社会。特に戦争は男性の立場で語られてきました。戦争の実際の姿をさまざまな証言から明らかにしていくことは、大切なことだと思います。

3、いくつか、気になつたこと

私の生まれた遼陽市でも、居留民会の記録にソ連兵の掠奪の様子が記録されています。遼陽市は都市部になります。「8月21日ソ連軍入城す」「ソ連兵士は掠奪の外婦女子を要求するもの多く日本婦人中には止むなく断髪男装して其の難を免れんとせしもの多数なりき。依つて居留民会に於いては特殊慰安所を急設するの外、別に特殊接待婦を準備して其の緩和に務めたるを持って漸く被害を最小限度に喰い止むことを得たり。」と書かれています。ソ連兵のこの行為は追究されるべき犯罪ではないのか。ザバイカル軍36軍が何をしたかソ連はつかんでいるのだろうか。また、接待所や接待婦というのは、当時の満洲では、あちこちにあったのではないか。

根こそぎ動員で、殆どの男性を召集し、開拓団員に終戦の知らせもせずに見捨てたことに対して、日本政府はわびるべきだが、充分わびてきただろうか。「国の為に尊い犠牲を払われた」と白々しい言葉で、ごまかしているように感じる。

あの戦争の大きな反省から、「2度と戦争はしません」と誓つた憲法9条を守ることがいかに大切か、施政者は自覚しているのだろうか？

当時の女性の立場ということでは、黒川開拓団での相談は男性だけで行われたいいうことが気になりました。女性の声は聞かなかつたのだろうか？

山下みち子さんは、「私たちは下々だから、上のことはわからない。どういうふうに決まつたかわからない」「ウォッカか何かで接待するのかと思った」と言っておられました。悲しいですね。安江善子さんは、妹を守りたいと耐えられない程の犠牲を耐えてこられました。そして守りたい人がいるというのが人間です。反対に人間の願いを打ち壊す、もっとも残虐なことを人間がする、それが戦争なのだと思います。

4、おわりに

今回の番組をみて「乙女の碑」が伝えることを、これから多くの人が受けとめていけばいいなと思いました。